

ディレクター日誌(活動・子ども達の様子)

期 日：令和4年7月31日(日)～8月7日(日)【7泊8日】

場 所：十種ヶ峰青少年自然の家及び周辺山域

参加者：県内の中学生・高校生(男子10名・女子6名)

令和4年7月31日(日) 1日目 出会いの日(ふれあいの日) 十種ヶ峰青少年自然の家～方丈原(泊)

今年も、こうして「心の冒険・サマースクール」を実施できることに、感謝の気持ちがこみ上げる。これまで、たくさんのスタッフの方々が支え、たくさんの子どもたちがここから一步を踏み出してきた。子どもたち一人ひとりの大きなチャレンジになることは間違いない。そして、スタッフとしても子どもたちの成長をいろいろな見方で捉えることができる機会である。子どもたちと一緒にスタッフも成長していきたい。

さあ、クエストキャンプのスタートだ。子どもたちの表情からは、ドキドキとワクワクが入り混じり、緊張がうかがえる。事前説明会ぶりに会ったインストラクター(以下イントラ)や班の仲間と少し会話をして、少しずつ表情が和らいでいくのが分かった。そして、これから始まる冒険への大きな期待も感じた。



開会式では、みんなで目を閉じて、心を落ち着かせた。「この8日間しっかりと自分と向き合い、仲間と向き合い、今まで気付いていなかった新しい自分に出会って欲しい」これが、今年の大きなテーマだ。そして宿題を3つ。①自分の好きなどころは何か。②全力って何か。③協力って何か。閉会式で会う子どもたちがどんな思いを抱いているのかとても楽しみである。

開会式が終わると、各班で行程に必要な荷物を大きなザックにつめていくダッフルシャッフルを行う。山の中で安全に生活するために、何をどんな順番で詰め込んでいくのか、説明を聞きながら丁寧にパッキングを進めていった。子どもたち同士の会話はほとんどなく、イントラからの指示がほとんどで、言われるがままに作業が進んでいく。困っている仲間がいても、まだ手や声は出なかった。全体的に動きがゆっくりで、なかなか活動が進まない様子である。とは言っても、早く今日のテン場へ行きたいので、イントラだけが少々焦りながら、準備を進めていった。

今日のテン場は、方丈原。各班体育館を出発し始めた。しかし、ここで、一生懸命詰め込んだ重たいザックと、永遠と登り続けるのではないかと想像してしまうような坂が、一気に子どもたちの前に立ちはだかった。気持ちも体もついていかず、目からは涙があふれてくる。少し歩いたところで立ち止まり、「ぼくには無理」と声もれてくる。誰もがそう思っているからだろう、なかなか子どもたちで声をかけ合うことは難しい。イントラとサブイントラが励ましたり、山の歩き方をレクチャーしたりしながら方丈原をめざした。



テン場(宿泊地)に着き、すぐにタープとテントを張り、夕食作りに取りかかった。ライトを付ける頃になると、今度は虫たちが集まってきて、さらに子どもたちの気持ちが下がってきた。何とか夕食を終え、後片付けやミーティングなどを済ませ、それぞれのテントに入っていった。

早朝5時。各班が少しずつ動き始めた。今日は、まず神角神社をめざして歩き、そこからMTBに乗り、QV(クォーツバレー)をめざす。



女子1班は、昨日のミーティングの時に、声をかけても反応がなかったことが課題として挙げたので、今日のめあてを「楽しく反応する」と決めて出発した。しかし、昨日と同様に背中へのしかかるザックの重みと歩き慣れない山道に、悪戦苦闘していた。そんな中でも、歌を歌ってみたり子どもたち同士で話をしたりと昨日よりも少し頑張ろうとしている子もいる。イントラはそれを見逃さない。昨日よりも頑張ろうとしている子どもたちを価値付けながら、子どもたち同士の関係をつないでいく。子どもたちの距離感が昨日よりもぐっと近くなり、神角神社に着いてからの昼食中は女子トークで盛り上がった。

男子3班は、朝の出発が少し遅くなった。スパッツのゴムが見当たらない。昨日あったものが、一晩のうちになくなるわけではないだろう。装備が一つでもなければ、そこから先には進むことはできない。それは、山で必要なものを揃えて持ってきているからであり、また、これまでも大切に使用されてきた物を「なくなった」という一言で済ませるわけにはいかないからだ。みんなでなんとか探し出し、やっとのことで出発できそうな頃には、予定時刻より2時間過ぎていた。神角神社には、疲れた表情で到着し、ザックを下ろせばよいのだが、ザックを下ろすためのブルーシートを広げるのにも時間がかかる。自分のことでいっぱい、誰かのために行動するところまで、余裕がもてていないことにイントラは気付いていた。自分と仲間と自然。まだまだ自分が一番。イントラが落ち着いた口調で、「～しなさい」という指示的な言葉掛けではなく「～するといいんじゃない」といった、自分中心の視点から仲間を気遣う視点に気付かせる言葉掛けをすることで、子どもたちは考えながら行動することができる。少しずつ変わり始めている気がしてきた。



男子2班は、歩き始めるとどんどん進んでいく。その分、自分の思いを伝えるタイミングがなくなり、一人できつい思いを抱えながら歩いていたようである。荷物の重さを比べてみると、一人に重さが偏っていたようで、神角神社に向かう下り坂で、涙があふれた。少し立ち止まり、イントラがその子の思いを聞くが、自分の気持ちを言葉で表すことが難しい。頷くか首を振るのが精一杯のようで、イントラが問いかけながら今の思いを聞いていく。最初は子どもたち同士の関係をイントラがつないでいき、今後少しずつ子どもたち同士で関係を深めていくであろう。ステップを踏みながら集団になっていく感じがした。

さて、神角神社で昼食をとった各班は、MTBでQVに向かった。自転車を止められそうな所で立ち止まり、地図を確認しながら進んだ。明日は、ファイナルツアーを意識し、高岳の山頂へ、または高岳周辺のバックパッキングである。またさらに集団の力が高まるチャレンジが待っている。

令和4年8月2日(火) 3日目 挑戦の日(困難の克服) 高岳登頂～ QV(ソロ入り)

天気は良好。少しずつ子どもたちができるようになったところをしっかりと伝え、自信へとつなげていく段階である。女子1班と男子3班は高岳の山頂をめざし、男子2班は高岳周辺のバックパッキングを行った。高岳は1000m級の山である。ファイナルツアーで十種ヶ峰に登るが、それよりも高く山頂からはよい景色を眺めることができる。前半は地図の読み方や休憩の取り方などをレクチャーしながら、山頂をめざした。この日は気温も高くなり、体調管理に十分に配慮しながらの活動となった。



令和4年8月3日(水) 4日目 思索の日(克己と反省) QV(泊)

ソロはそれまでの「動」に対して「静」のプログラムである。子どもたちにとって、疲れた体と心を休める時間であるとともに、「自分」や「他人」、「それまでの出来事」を見つめ、自分を振り返る貴重な時間である。女子1班と男子2班は昨日の夕方から、男子3班は4日目の9時頃からソロに入った。子どもたちには、これまでの自分を振り返って日記を書いたり、ある班は1年後の自分に手紙を書いたり各自が思い思いの時間の過ごし方をしていた。ソロ明けは、各班それぞれとなり、16時ごろから徐々に動きが見られた。ソロを挟み、プログラムの後半に向けて、各班で大事にしていきたいことを確かめることができたようである。翌日からは、いよいよグループがメンバーの力で歩みを進めていく段階に入っていく。



1年後の自分へ
何にでもチャレンジして全力で取り組める人になるよ。そのためにあと数日サマースクールで学んで帰りたいと思っているよ。



「家族に会いたい。たくさん家族に支えられていたんだと思った」「支えてもらったらいけないの？その分、自分にできることをしたらいいんだよ」
ソロから明けて、班の目標が見えてきた。



ソロ明け…なぜかこみ上げる涙。いろんな感情が入り混じる。この仲間でよかったと思えるようにしたい。仲間との関係がぐっと強くなった気がした。

今日からは、ファイナルツアーを意識しての活動となる。イントラの手を借りずに、グループだけで目的地をめざしてチャレンジする。生活や活動のほとんどを自分たちで話し合い、決定し、行動していくことになる。グループで困難を克服するため、それだけ大きな成功体験を味わうことができる。イントラたちは、翌日の十種ヶ峰ピークアタックに向けて、安全に関する必要最低限のことだけ直接的な指示を行い、徐々に活動を子どもたちに任せていく。子どもたちはこれまで教わってきたことを基に、自分たちで協力し合って活動を展開していくのである。



男子2班は、QVからロックサイトまで歩いて移動する。ロードを通ることになるので、なるべく早く出発したい。朝食は軽く済ませて、ロックサイトに着いてから食べることにしたようだ。他の班より人数が少ないので荷物の負担も多いが、手を止めず、足を止めず、頑張る姿に「行ってらっしゃい」と声をかけた。

この日はとても快晴で、太陽が元気になり始めると、子どもたちの元気がなくなってきた。サポートスタッフからの氷の差し入れが子どもたちのパワーになったようだ。バンダナに氷を入れて巻いたり、口に含んだりして歩きを進める。しっかりした足取りで無事にロック下に到着した。

男子3班は、探し物を見つけることからスタートした。ないわけがないが、見つかるまではドキドキする。何とか見つけ出して、いよいよ出発という頃には、9時を回っていた。ロッククライミングにチャレンジするのも、時間の制限があるので少し急いで、MTBでロッククライミングの場所をめざしていった。

女子1班もMTBでロッククライミングの場所まで移動。ロッククライミングへの挑戦を始める。初めにロッククライミングに挑戦するにあたって、基本的な登り方や下り方、ロープワークについて説明を聞き、いよいよ岩山に挑んでいく。目の前に見える反り立った大きな岩山に、「どうやって登るの?」と声が出てくる。この岩山は一人ずつ登っていくけれども、決して



一人では登ることができない。個人の挑戦でもあり、チームの挑戦でもある。岩山に張り付いててっぺんをめざす仲間に、絶えず下から声をかける子どもたち。見ているスタッフも一緒に歯を食いしばる。「一生懸命は人の心を動かす力がある」と思った。てっぺんにたどり着いた子どもたちの表情からは、達成感よりも何だかほっとしたような感じが伝わってきた。

3班すべてのロッククライミングが終了したころには、お昼を過ぎ、太陽も元気いっぱい照らし付けるので、凍らせたゼリー飲料の差し入れが最高においしくて気持ちよかった。

簡単に昼食を済ませ、先を急ぐ。今日のテン場である福谷まで移動していく。ロックサイトから福谷までは裏山を越えていくルートでほしい1時間程度で着く予定ではあったが、スタッフが思っていたようには進めなかった。2日ぶりに大きな荷物を背負っての山歩きということもあって、足取りも重く、裏山というだけあって木々が生い茂り、はっきりとルートが分からない道なりに大苦戦した。結果、何とか無事に裏山を越えて福谷の奥まで歩いた頃には、すっかり日も暮れていた。明日は、ファイナルツアーである。今日の学びは大きい。ロッククライミングで経験した達成感、裏山越えで感じた仲間の支え、全てを力に変えて、明日のピークアタックに挑んでいく。

ファイナルツアー当日。早朝4時頃から雨が降ってきた。雨はだんだんと強くなり、起床と同時にカッパを着用した。思った以上に振り続く雨に、本部から出発するのを少し待つように伝えた。出発予定から1時間して、本部も決断。もしかしたら、途中でエスケープの可能性があるかもしれないが、出発の合図を送った。天気の回復を見込める状況でもあり、子どもたちのこれまでの様子と成長を信じた上での判断ではあったが、出発する判断をとるまでのドキドキ感は今でも忘れられない。

子どもたちにも、この夏で一番のチャレンジができるように、「行ってらっしゃい」と見送った。



本部のスタッフは山頂で各班の到着を待つ。時々イントラから無線で入る情報からしか子どもたちの様子は分からないので、首を長くしてひたすら待った。一番に声を聞かせてくれたのは、男子3班であった。汗がしみ込んだシャツを着て、深くかぶった帽子の下から少しおどけた表情を見せながら「ここが山頂？」というような表情をして、6人揃って登ってきた。スタッフの出迎えに表情がほぐれ、山頂に着いた実感がわいてきているようであった。朝はあれだけ降っていた雨も止み、どんどんと空が切り替わり、山下をくっきりと見渡せるほどの最高の景色が見られた。



その後男子2班が登ってきた。サブイントラが息を切らせて少し先に上がってきて、子どもたちを出迎えた。その様子を見ていると、胸がじんわりと熱くなってくる。子どもたちを一番近くで見守り、支えてきた時間が、ここに詰まっている気がした。少し涙をぬぐう子どももいて、しんどい中でもやり切った思いを抱いていてくれると嬉しく思った。

男子の班が山頂に到着しているころ、女子1班はやっと作業

小屋にいた。「もうこれ以上進めない」と、気持ちが体についていかず、そこから動けずにいた。イントラたちは子どもたちの様子をじっと見守った。子どもたちがこれからどうするか自分たちで決めるまで、じっと待った。もちろんタイムリミットがあるので先を急がなくてはいけないというのは分かっている。でも、待った。子どもたちも仲間の気持ちが分かるからこそ、誰もその子を否定しなかった。その子の思いを優しく受け止め、そして優しく心を動かしていった。「行く」と決めるまでに、1時間を超える大ミーティングではあったが、その後の足取りはしっかりとしたもので、仲間と一緒に一步一步確実に山頂に向かっていった。17時半、女子1班山頂到着。本当にここまでよく歩いてきた。



方丈原では2回目の朝となる。初日にここでたくさんの初めての体験をして、早々と帰りたくなった記憶が、今ではとても懐かしく感じるのは、これまでにたくさんのチャレンジを積み重ねてきて、心も体も少し強くなったからだろう。7日目の朝を迎えた。

この日の天気は曇り時々雨の予報。できることなら雨は降ってほしくない。今日は7日間子どもたちのチャレンジを支えてくれたテントやタープなどを丁寧に拭き清め、乾燥させる日なのである。これまでのチャレンジで、泥や汗があちこちに染み付いている。「心の冒険」を支えてくれた装備を「ありがとう」の気持ちをこめて、ひたすら拭き清め、洗い清め、丁寧に乾かし、来年の参加者へ受け継いでいくのである。

方丈原から十種ヶ峰青少年自然の家までの道のりは、あっという間であった。初日に歩いた道のりを戻るのが、足取り軽く下りてきた。各班の一体感が違う。お互いの距離が近くなり、お互いの声が届くようになり、お互いの気持ちも察し合えるようになってきた。キャンプの終わりが近いことは分かっているが、それとともに、一緒に過ごしてきた仲間との別れも近づいているということである。残りの時間を大切に、さあ、雨が降る前にどんどんやっつけよう。ザックやタープを拭きながら、たわいもない話が続き、何となく居心地がいい。口は動けども、体は疲れていくので、だんだんと作業の手が止まる…。するとイントラからの声のとんでくる。やるしかない。子どもたちも頑張っって再び手を動かしていく。

途中、7日ぶりの入浴もした。なかなか石鹸が泡立たないほどに苦労と汗にまみれた身や心を、温かいお風呂でさっぱりとリフレッシュ。そしてダニチェックも忘れずに行った。

夕食はちらし寿司。ラストナイトディナーである。みんなでご飯を炊いて食事を作るのも、これが最後である。残った食材を上手に使いながらオリジナルの夕食が完成し、ライトの灯がきれいに光り出した頃、お腹もいっぱいになっていった。

そして、ラストナイトミーティング。このキャンプでどんなことを感じ、何を考えたのか、じっくりと振り返る。初日から今日までの軌跡を地図で振り返り、自分の目標の達成度やグループで起こった様々な出来事も今では笑い話となり、温かい笑い声が聞こえる。でも、次第に声のトーンが落ち着き始め、自分たちの思いを語り始めた。あんなに帰りたかったのに、別れが名残惜しい。何度も立ち止まり、もう無理だと思ったこともあっただろう。でもここまで乗り越えて頑張ることができたのは、間違いなく仲間が存在があったからである。



一人ずつ、班のメンバー全員に感謝の気持ちを伝えた。仲間からの「ありがとう」の言葉は、自分のいい所や新しい自分を見つけてくれたような、「あなたはあなたでいいんだよ」って教えてくれたような感覚となって、心の中にずっと溶け込んでいった。この仲間に出会えてよかった。

最終日。十種ヶ峰青少年自然の家の体育館で朝を迎えた。いつも通りの5時起床も何だか心が軽い。朝食はカートンドッグ。野外炊事場に移動。パンにソーセージとレタスをはさんでアルミホイルを巻いて牛乳パックに詰め込む。牛乳パックの端っこに火をつけて牛乳パックが燃えるのをじっと待つ。アルミホイルを開けると、ちょうどよい感じに焼けて温まったホットドッグが完成した。ホットドッグを頬張りながら子どもたちの笑みがこぼれる。このままゆっくり朝ご飯を食べていたい気持ちもあるが、まだクリーンナップの仕上げが残っている。テキパキと朝食を済ませ、再び体育館に戻り最後の点検を受けた。同時に、感想文を記入したりバンダナにお互いのメッセージを書き込んだりと、班で残り少ない時間を味わうように過ごしていた。



8時半ごろから保護者とインストラクターの面談も行われた。イントラは8日間の子どもの様子を具体的な出来事を基に保護者に伝えていく。話をする中で、子どもの成長を前向きに捉えていくことができる。地図で歩いてきた道のりを辿りながら話を進めていった。

いよいよ、新たな旅立ちとなる個人ランである。これまではグループで活動してきたが、最後は個人での挑戦になる。これからの人生においても、自分で目標を設定し、自分の挑戦を続けていくことになる。仲間から直接励ましの声を受けることはないが、これまでともに過ごした仲間の存在を思い出しながら、自分の力に変えて走り続けてほしい。そんな願いがこめられたプログラムである。

10時半、十種ヶ峰青少年自然の家のキャンプ場入り口にサブディレクターが子どもたちを集め、ディレクターからの手紙を読んだ。ディレクターは子どもたちのチャレンジポイントでもある折り返しポイントで待機していた。今回の個人ランのルートは、今回のキャンプで2泊した思い出のある方丈原をめざして走り、池の周りを自分で決めた周数だけ走り、再び十種ヶ峰をめざして戻っていく。自分で決めた周数だけ走るとするのは、自分で目標を立て、それに向かって自分の足で踏み出して行ってほしいという思いを込めた。



じゃんけんをして、あいこになったらスタートしていく。急な下り坂を下って永遠に続くような登り坂を登って、次々に折り返し地点までやってきた。1周の子もいれば、3周する子もいた。目標は違っていい。3周走ることがすごいわけではない。自分で決めた道を信じて進むのだ。もう1周するの?と聞き返したくなるくらい、きつそうに走る子もいたけれど、自分で決めて、自分で進んでいこうとする姿が最高にかっこよかった。全員が自分の目標に向かって最後まで走り切った。



・・・そして、閉会式。

「聞いてください!私がこのキャンプで見つけた、新しい自分は、人と関わることが好きという事です。このキャンプでたくさんの人に出会い、たくさんの人に支えられていることに気付きました。みんなのチャレンジを見ていると、私も頑張ろうって力をもらいました。だから人って成長するんだらうなって思いました。人とつながれて、たくさんの方の笑顔を見ることができました。こ

んな人とのつながりを、これからも大切にしていきたいです。」

ディレクターからの第一声。この後に続いて、子どもたちが一言ずつ話し始めた。このキャンプで見つけた新しい自分。子どもたちも一人ひとり、自分の口で伝えてくれた。一人では気付けなかった自分のいい所。仲間がいてくれたから見つけれられた自分のいい所。「新しい自分」を見つけることってすごいことではなくて、頑張った自分を自分でしっかりと認めてあげることだと思った。



「協力って何だろうって考えたよ。みんなの姿を見ていると、協力すると早いなって思ったよ。そしたらね、なんだか嬉しくなって、笑顔が生まれるの。だから協力って大切なのかなって思ったよ。」

「全力って何だろうって考えたよ。みんなの姿を見ていると、全力って一人では出せない力なんだなって思ったよ。仲間がいるから全力っていう力が湧いてくるんだね。もう無理って何度も思っても、今日まで頑張ってきたみんなは最高にかっこいいよ。本当によく頑張ったね！」

さあ、新しい旅立ちの時。

「いってらっしゃい！」スタッフ全員で、参加者を見送る。この夏のチャレンジが、子どもたちの心の中で光り続けていくことを願っている。

